

『呂律早操旋宮図』

——明治期の声明の調子早見表について——

明 木 茂 夫

一、はじめに

最近本学では日本古典音楽関連の古典籍を幾つか収蔵した。ここではその内から、仏教の声明で用いられた一種の旋宮図について、その概要と簡単な使用法を紹介することとしたい。

この「呂律早操旋宮図」（以下本図と言う）は横^{26.5}センチメートル縦^{22.0}センチメートルの一枚物で、説明の本文と円形の音階図（旋宮図）から成る。さらに円形図の中央には二枚の円盤が同心円状に、中心を紙縷^{こより}で留める形で重ねられており、これを自由に回転させて音階の組み合わせを読み取ることができるようにになっている。円盤を回転させる形式の旋宮図は他にも存在し、例えば『古今図書集成』にもそのようなギミックを備えたものがあるが、基本的には絶対音高たる「十二律呂」を地^じに、相対的音階たる「五声・七声」を回転させて、「均^{いん}」と「調式」の音程配置を知るためのものである。一方本図の特徴としては、回転する円盤が同心円状に二重になっている点、そ

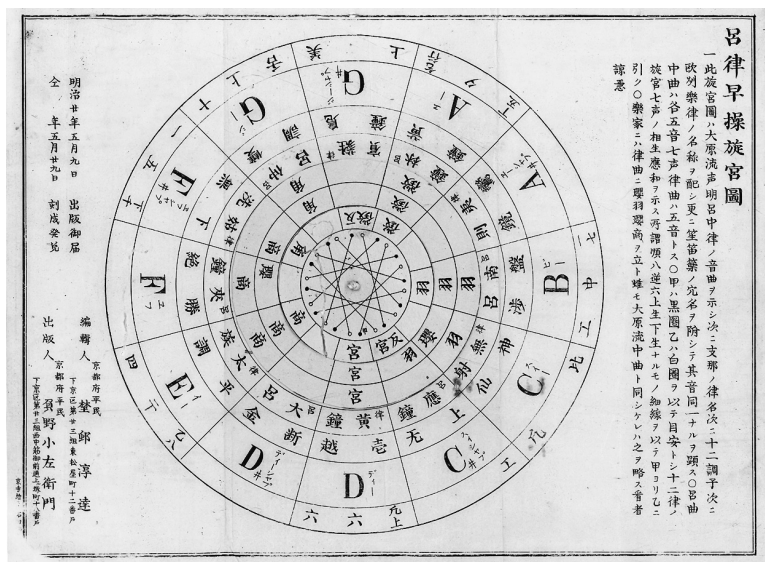


図1 呂律早操旋宮図

してそれが声明や雅楽で用いられる日本の調子を知るためのものである点、さらに笙と笛と簞簾の穴名が添えてある点、そしていかにも明治期のものらしく西洋音名が添えてある点を挙げることでしよう。

二、本文(付注)

図1に掲げたのが本図の全体である。中央に旋宮図が置かれ、右に解説が置かれている。この旋宮図の中央が紙縹で留められており、それを中心に二枚の円盤が自由に回転するように作られている。図ではやや分りにくい、中央部の同心円二つ分が一枚の円盤(以下これを内円と言う)、その外の同心円二つ分が一枚の円盤(以下これを外円と言う)となっている。つまり、内円 中央部のそれぞれ音程が順に直線で結ばれた円、及びその外の「宮」□「商」□「角」□「反徴」□「徵」□「羽」□「反宮」□と並んだ同心円
 外円 「宮」□「商」□「嬰」□「商」□「角」□「徵」□「羽」

「嬰」「羽」と並んだ同心円、及び「宮」□「商」□「商」□「角」□「徵」□「羽」□「羽」□と並んだ同心円である。また本文の紙に印刷され固定されている円をここでは便宜上「地」と呼ぶ。

次に解説の本文を文字に起こし、ここで用いられている用語に注釈を加える。文字は基本的に常用字体を用いた。

呂律早操旋宮図

一 此旋宮図ハ大原流声明呂中律ノ音曲ヲ示シ、次ニ支那^②ノ律名、次ニ十二調子、次ニ欧州樂律ノ名称ヲ配シ、更ニ笙笛^⑤樂ノ穴名ヲ附シテ其音同一ナルヲ類ス。○呂曲^⑥中曲ハ各五音七音、律曲^⑦ハ五音トス。○甲^⑧ハ黒圈乙^⑧ハ白圈ヲ以テ目安トシ、十二律ノ旋宮七声ノ相生応和ヲ示ス。所謂順八逆六上生下生ナルモノ細線ヲ以テ甲ヨリ乙ニ引ク。○樂家ニハ律曲ニ嬰羽嬰商ヲ立ト雖モ大原流中曲ト同シケレハ之ヲ略ス。看者諒焉。

(1) 呂中律 声明で用いられる「呂調」「中調」「律調」の三つの音階を指す。本図においては内円に「呂曲」が、外円の内側に「中調」が、外円の外側に「律調」が、それぞれ配置されている。

(2) 支那ノ律名 いわゆる十二律呂。絶対音高を示す音名。「黄鐘」から「応鐘」まで、八度に半音程で十二の律呂が並ぶ。その内奇数番目を「律」、偶数番目を「呂」と言い、本図では各律呂名の右肩に律呂の別が示されている。本旋宮図においては6時の方向に第一音たる「黄鐘」が置かれている。

(3) 十二調子 「耄越」から「上無」に至る、十二律呂の和名。

(4) 欧州ノ樂律ノ名称 いわゆる音名。音高は「黄鐘=耄越」が「D」とほぼ等しいので、歴代「黄鐘=耄越」

を「D」に当てている。本図では旋宮図の6時方向に「D」が置かれており、円盤を回転させる際ここを起点に考えると分かりやすい。

(5) 笙笛簞 地の円の最も外側に、笙・笛（龍笛等）・簞の音符（穴名）が置かれている。それぞれの音名の区画において、右が笙、中央が笛・左が簞の音符である。

(6) 呂曲中曲ハ各五音七声 呂曲は「宮・商・角・徵・羽」の五音に「反徵・反宮」を加えた七声から成る。その音程配置は中国の宮調式に同じ。これを図示するならば次のようになる。

宮調									
呂曲	宮	商	角	反徵	徵	羽	反宮	變徵	變宮

一方中曲は「呂調」「律調」とは異なる音程配置を持つ調である。但しその具体的な音程配置は諸説あり、また宗派によっても異なる。本図は「呂曲中曲は五音七声」と述べて、「宮・商・角・徵・羽」の五音に「嬰商」「嬰羽」の二つを加えた七声を以て表示しているのだが、図1から分かるように「嬰商」の「嬰」と「商」、及び「嬰羽」の「嬰」と「羽」が二つの区画に分けて書かれている。そのためあたかも二つの区画に跨がっているように見える。これについて本図は特に説明しておらずその意図ははっきりしないが、ここでは場合によってどちらの音程も使用し得ることを示すものとして扱うこととする。中曲の音程には諸説あり、また「呂調」と「律調」の音程を合わせ持つ中間的な調の「合曲」（雅楽では「半呂半律」とも言う）も用いられる。恐らく本図はそうした場合に対応するため、双方の音程を兼ねるような表記にしたものであろう。ここでは以下のように、

中曲	宮	商	嬰商	角	徵	羽	嬰羽
----	---	---	----	---	---	---	----

「嬰商」と「嬰羽」を二区画分に跨がるよう表示した。

(7) 律曲ハ五音トス 律曲は「宮・商・角・徵・羽」の五音に、通常「嬰商」と「嬰羽」(それぞれ「商」と「羽」の一律上)を加えた七声から成る。本図は「律曲は五音とす」と延べ、「嬰商」と「嬰羽」を「商」と「羽」と表示し、それぞれ本来の「商」と「羽」の一律上に置いている。またここで言う日本の「律調」は中国の「羽調」と同じ音程配置を持つ。これを図示するならば次のようになる。

律曲	宮	商	角	徵	羽	
羽調	羽	變宮	宮	商	角	變徵

(8) 甲ハ黒圈乙ハ白圈 本図では、円の中央部に引いた直線によっていわゆる三分損益の生成順を示している。三分損一(順八)は甲＝黒圈から乙＝白圈へ、三分益一(逆六)は乙＝白圈から甲＝黒圈へ、それぞれ直線をたどるようになっていいる。

(9) 樂家ニハ律曲ニ嬰羽嬰商ヲ立 雅楽と声明で用いられる律調は基本的に同一のものであるが、雅楽ではその音程の名称に「宮・商・角・徵・羽」の五音及び「嬰商」「嬰羽」を用いる。但し、律調における「角」は中国の五声・七声及び日本の呂調の「角」より一律高いため、これを特に区別して「律角」と呼ぶ場合がある。一方本図では、右の注(7)で述べたように五音の名称のみを用いている(「商」と「嬰商」、「羽」と「嬰羽」

をそれぞれ兼ねて「商」「羽」とする。これを図示するならば次のようになる。

楽家									
本図	宮	商	嬰商	律角	徵	羽	嬰羽		
	宮	商	商	角	徵	羽	羽		

雅楽で用いる「嬰商」「嬰羽」と同じ音程であるが敢えて表示しなかったので「看（み）る者（もの）焉（これ）を諒（りよう）とせよ」とことわり書きを入れているわけである。

三、円形図により示される音程

次に、本図の円盤を回転させることにより示される音程を具体的に整理してみたい。歴代こうした音階の説明に円形の旋宮図が用いられるのは、理念上1オクターブで反復される音名や階名を円形に配列することによって、いずれを主音にする調も途切れることなく表示できる利点があるためである。但しここでは、ある調の音程配置を一目で見やすくするために、敢えて横方向に展開した表を用いることにする。

図2は、地の円の「黄鐘」壺越」（即ち十二律呂の第一音）に、内円の「宮」（七声の第一音）、及び外円の「宮」を合わせた状態である。その下の表はそれぞれの音程を横方向に展開したものである。円の6時の方向にある「宮」と「黄鐘」壺越」が下の表の表の第一行にあり、旋宮図の時計回りの順に、順次下の表の行が左に向かって配置されている。内円と外円を時計回りに回転させるのに応じ、下の表では内円の段と外円の段を順次左向きにずらして行くことになる。十二律呂より左にはみ出した行は、一周回って右の第一行に順にもどして行く。円形図の場合、特に

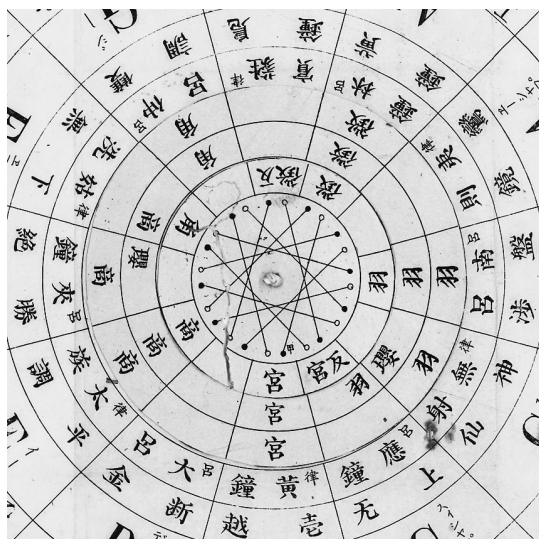


図2 内円・外円の宮が黄鐘=巷越の位置にある状態

反宮			羽			徵	反徵			角			商			宮	呂曲	内円	
嬰羽			羽			徵			角			嬰商			商				中曲
	羽	羽			徵			角			商	商			宮	律曲			
呂	律	呂	律	呂	律	呂	律	呂	律	呂	律	呂	律	呂	律	呂	律	外円	
応鐘	無射	南呂	夷則	林鐘	蕤賓	中呂	姑洗	夾鐘	太簇	大呂	黄鐘	土律							
上無	神仙	盤渉	鸞鏡	黄鐘	鼻鐘	双調	下無	勝絶	平調	断金	壹越	土律							
C _#	C	B	A _#	A	G _#	G	F _#	F	E	D _#	D							地の円	
工	比	一七	乞行		美	十	下千	乙八		凡上		笙							
		中	夕			上	五	テ		六		笛							
	凡	工	丁五		上	舌	一	四		六		簞簞							

内円は、中国風に言えば「黄鐘均の羽調式」即ち「黄鐘羽」である。そして外円は「南呂＝盤渉」に宮を置く律調即ち「盤渉調」である。これを図示するならば、

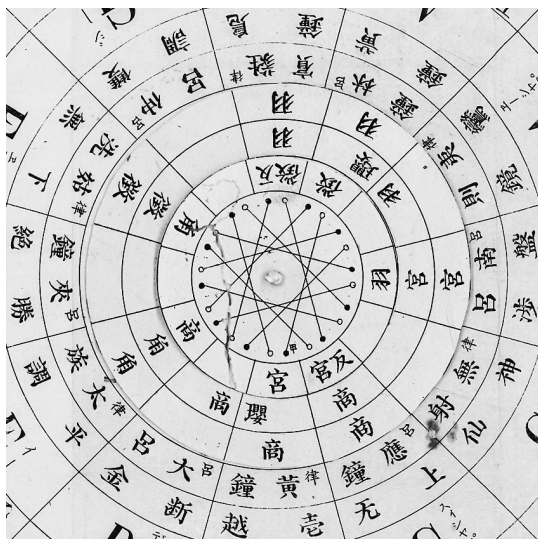


図3 内円の羽・外円の宮を南呂＝盤渉に合わせた状態

は、この状態での音程を横方向に展開したものである。

	徵	反徵	角	商	宮	反宮	羽	呂曲	内円
	嬰羽	羽	徵	角	嬰商	商	宮	中曲	
	羽	羽	徵	角	商	商	宮	律曲	外円
律	呂	律	呂	律	呂	律	呂	律呂	
夷則	林鐘	蕤賓	中呂	姑洗	夾鐘	太簇	大呂	黄鐘	地の円
變鐘	黄鐘	鳧鐘	双調	下無	勝絶	平調	断金	志越	
A _#	A	G _#	G	F _#	F	E	D _#	D	
	乞行	美	十	下千	乙八		凡上	工	
	夕		上	五	テ		六		
	丁五	上	舌	一			六	凡	
								中	
								一七	
								笙	地の円
								笛	
								簫	地の円
								篳篥	

黄鐘羽
盤涉調

十二律呂

盤涉	南呂	宮	羽										
神仙	無射												
上無	応鐘	商	反宮										
志越	黄鐘	商	宮										
断金	大呂												
平調	太簇	角	商										
勝絶	夾鐘												
下無	姑洗	徵	角										
双調	中呂												
鳧鐘	蕤賓	羽	反徵										
黄鐘	林鐘	羽	徵										
鸞鏡	夷則												

となる。このように、この状態での内円の羽調式と外円の律曲とは音程配置が等しくなっている。つまり、声明や雅楽の律調は中国の羽調式と音程の配置が等しいことが、ここから視覚的に理解できるのである。このように、二重の同心円盤を回転させる形式の本図は、声明で用いられる呂曲・律曲・中曲の音程を知り、中国の十二律呂と宮調の基本を学ぶ上で、便利なものであると言える。

四、刊記について

本図の左端には次のような刊記が記されている。

明治廿年五月九日 出版御届
全 年五月廿九日 刻成発兌

編集人 京都府平民
埜邨淳達

下京区第廿三組東松屋町十二番戸

出版人 京都府平民

負野小左衛門

下京区第廿三組西中筋御前通上ル堺町十八番戸

出版人の負野小左衛門については、各種目録において浄土宗関係の書籍の編者や出版人として同じ氏名が確認できる。一方編集人の埜邨淳達については未詳ながら、野村、淳達の表記ならば仏教書の編者として各種目録に確認できる。例えば『三帖和讃略解』（仰誓著、野村淳達訂、永田文昌堂、明治十二年）がそれである。さらに、編集人の住所が現在の下京区東松屋町に当たるのならば、地図上でここに確認できるのは法光寺という浄土真宗のお寺である。浄土真宗は天台宗（本図に言う大原流）や真言宗と並んで声明の盛んな宗派である。想像の範囲を出ないが、埜邨淳達が本図を出版した背景には、自身の実践に基づいた実用的な意義があるように思われる。

なお本題とは外れるが、本図には一箇所だけ虫損が見られる。幸いにも文字や記号の読み取りには支障のない程度ではあるが、それは内外二枚の円盤と地の紙を貫通している。試しにこの穴がぴたり重なるように二枚の円盤の位置を定めると、呂曲・中曲・律曲の「宮」と黄鐘・壹越・Dとが並ぶ状態（即ち図1と図2の状態）となる。これは、呂曲・中曲・律曲の主音が十二律呂の第一音に配置される位置、即ち「黄鐘宮」という基本の位置である。つまり長期保存中の、虫損が生じた時期においては、回転する円盤は基本の位置にリセットした状態に置かれていたと言える。些末なことであるが、本来の所有者が本図を大切に使用・保管していたことがしのばれる。